

るひとがたくさん見つかった！ 自分だつたらうれしくてたまらないだろうな、と思う。

僕は編集者としても物書きとしても、売れっ子でもなんでもない。好き放題つくった本が壊滅的に売れなかったことも、何度もある。というか、キャリアの早い段階で「あ、俺が好きなのにつくと、売れないんだな」とわかってしまった。以降、どうしたら他人に響くんだろう？ というメカニズムを分析して、ものをつくるようになった。

だからこそ、ネットで自由にやってみたらうまくいった、という人たちがうらやましい。

もちろん、ネットであれ商業出版であれ、ほとんどの作品は日の目を見ずに沈んでいく。成功者は、どこでもひとにぎりだ。それでも、自由にもものをつくるということそれ自体が、人間にとっては救いになる。そ

京は南青山のインターセクト・バイ・レクサスという会場で、ドレスコードが「リゾートフォーマル」というパーティーが開かれました。男性はハーフパンツを履いてくること、というのが条件です。主催者は

れができるだけで、十分じゃないか。おまけとして、うまくいけば注目されて本も出る。そういう場所ができ、そういう場所があたらしい才能を育み、次々に鳥がはばたいていること。それを僕は地上から祝福し、知らしめたいと思うのだ。

クールビズと ハーフパンツの復活

中野香織

なかの かほり 明治大学特任教授

クールビズ開始から一〇年目の夏を迎えました。昼休みのオフィス街で見かけるビジネスマンの夏スタイルも、当初に比べればずいぶん違和感が少なくなりました。ここまで普及すれば、クールビズは日本における「慣習」として定着したと見ていいのかもしれない。

さらに軽装化をすすめるスーパー

こやま 薫堂さんのナゾの友人、チャリ・ヴァイスという旅好きな趣味人。まあ、この新ドレスコードの舞台裏を申し上げると、伊勢丹メンズ館の販売促進という隠れミッションも負っていたのです。

当日、どうなることかとハラハラワクワクしていましたが、集まった一〇〇名を超える男性たちは、社交上の礼節感を保ったハーフパンツを見事に着こなし、華やかに装ってきたのでした。上は思い思いのジャケットやタイで。足元はソックスやハイソックスがあれば、素足のケースも多々。すね毛を手入れしている人もいればありのままの人も。なんでもありですが、ともかく文句なしに「リゾートフォーマル」感のある、大人の社交ハーフパンツスタイルの見本市となりました。

この場において想像したのは、一八八六年のアメリカのタキシードパー

クールビズは三年目に入りました。従来のクールビズとの違いは、原則不可であったTシャツ、ジーンズ、サンダルが、「TPOに応じた節度ある着用に限り可能」になったこと。依然として、許されていないアイテムとして残ったのは、タンクトップとハーフパンツです。

タンクトップ姿でのビジネスはさすがにありえないと思うのですが、ハーフパンツはどうでしょうか？ すでにトム・ブラウンというアメリカのデザイナーが、数シーズン前からハーフパンツのメンズスーツを提案し続けています。メンズ誌の編集長などは率先して着用し、ビジネススタイルとしてハーフパンツ姿で公の場に登場しています。見渡せば、売り場にもフォーマルな印象のハーフパンツがけっこう出そろっているではありませんか。

そんなことを感じていた矢先、東

クの情景でした。ここで開かれた「タキシード・クラブ」のパーティーにおいて、タバコ王ロリロード三世の息子が、燕尾服に着替えるのを忘れ、スモーキングジャケットを着たまま会場に現れたという「事件」が起きました。タキシード誕生の由来として伝えられる伝説のパーティー。新しい服装の基準が立ち現れた瞬間の興奮って、南青山のこの夜の感覚と似ていたのではないのでしょうか。

この勢いを見てみると、男のハーフパンツは、遠からず、ビジネスにおいても「アリ」になっていく気がします。もとより、洋服の世界において、男は何百年も半ズボン履いて脚線美を誇っていました。十八世紀末のフランス革命を機に長ズボンが定着し、それが二〇〇年ばかり今に続いて「慣習」化しているだけ。ゆえに男のハーフパンツはむしろ「復活」と呼ぶべきなのですが。

